

今年の干支はイノシシである。中国などではイノシシの代わりに、ブタが干支の動物となっている。イノシシとブタは原種と家畜との関係であり、古来、イノシシと人間、ブタと人間はさまざまな関係を育んできた。特集では考古学、生物地理学、中国文学の分野から、その関係について検証してみたい。



生け捕りにされた後、飼育されているイノシシ(台湾)



清代『西遊記図巻』に描かれる猪八戒



明代猪八戒像(東北大学所蔵)



獣道を駆けるイノシシ



トルコのギョベクリ・テペ遺跡

## 人間くさい動物 —イノシシとブタ—

野林 厚志  
(のばやし あつし)

本館文化資源研究センター

今年(乙未)は十二支の最後をしめくくるイノシシの年である。イノシシに与えられた一般的なイメージは猪突猛進のことばでいいあらわされるように、勢いのある、まっすぐな、思い込みの激しい(一)動物だというものであろう。あるいは、ウリ坊(イノシシの子)の姿かたちから思い浮かぶのはユーモラスな可愛い動物の様子かもしれない。あまり知られていないのだが、じつはイノシシはとてもデリケートな動物だといわれている。環境の変化を敏感に感じるとる能力は他の動物に勝るとも劣らない。森林の伐採や地震の影響で、イノシシの群れがもともといた場所からすつかり姿を消してしまったという話は時折耳にする。また、幼少のころの死亡率はとて高く、一歳になるまでに半数あまりのウリ坊は死んでしまう。人間側が抱いているほど、イノシシはがさつで暢



チベット系の家畜ブタ



かまどの神様をまつるお札  
(中国・福建省)



中国では  
干支の最後は  
ブタがつとめる

気な動物ではなさそうである。

### 害獣としてのイノシシ

一方で、農業にたずさわる人びとにとっては、イノシシはあまりありがたくない動物だろう。日本ではむかしから畑を荒らす害獣の代表格がほかならぬイノシシだからだ。各地に残るシン垣は人間とイノシシとの攻防史をものがたる遺跡に他ならない。最近では電気の通じたシン垣も用いられて、な

んとか農作物をイノシシから守ろうとする工夫がなされている。逆にこうしたことを利用したイノシシ狩猟の方法があったりする。筆者が調査している台湾原住民族のバイワンの人びとには、サツマイモ畑に寄ってくるイノシシを待ち伏せして仕留めるパラオンとよばれる狩猟法が伝えられてきた。シン垣が人間とイノシシとの知恵比べであれば、待ち伏せにひっかかってしまうかどうかともまた人間とイノシシとの知恵比べなのだろう。そんな彼らに、日本で

は、今では街中にまでイノシシがやってくるのだという話をすると、何故、日本人の私たちはイノシシを捕まえないのかと不思議がられた。政府によって山間部での狩猟がひどく制限されている彼らにとって、あちらさんから街中へできてくれるのだから狩猟には好都合だというのである。

### 生まれ年は、ブタ年

ところで、台湾の原住民族の人たち

にはもともと十二支という動物の役割回りといたった考え方はなかった。現在では台湾の多数派をしめる漢族系の人びとの習慣に影響されて、十二支を受け入れている。そして、来年の干支はイノシシではなくブタというのが彼らの一般常識なのである。いうまでもなく、中国における干支の動物はイノシシではなくブタであり、来年はブタ年となる。「自分の生まれ年はブタ年です」といういい方は、日本のイノシシ年といういい方に慣れた我々はどことなく違和感を覚えてしまうだろう。日本でなぜ十二支の最後のしめくりがブタからイノシシになったのかについては諸説あるが、イノシシを十二支の動物に加えているのは日本くらいであることは確かだ。

### 人間がみずからの姿を投影

このイノシシとブタの関係にはよくよく考えてみると、他の動物にはない特徴的な面がいくつか見受けられる。イノブタという名前を聞いたことのある読者の方は少なくないだろう。イノシシとブタから生まれた雑種の第一代のことだが、このイノブタは子孫を増やすことができる。すなわち、イノシシとブタは生物学的には同種だということになる。そして、現在、品種改良を重ねられ、さまざまな姿かたちに変わっ

ていったブタの祖先種(野生種)は基本的には現存するイノシシであると考えられている。これは、ヒツジ、ヤギ、ウシ、イヌやラクダ科の家畜の祖先種が現存していないことに比べると、かなりユニークな家畜化の過程をたどった動物であると言える。野生であるときの人間とのかかり方と家畜になってからの人間とのかかり方を同時代的に見せてくれる動物種のひとつであり、家畜化の過程を生物学的な側面からだけではなく、文化的な側面からもたどっていく可能性を与えてくれる動物がイノシシでありブタなのである。イノシシとブタと人間は、じつは家畜化によってブタが誕生して以来、共存してきた仲なのである。こんな関係は他の十二支の動物とのあいだには見当たらないのではないだろうか。

害獣として敬遠される反面、どこもなくユーモラスな風貌から決して憎みきれないイノシシ。宗教上の理由で食することを禁じられた地域があると思えば、財産の象徴として崇められることもあるブタ。色々な意味づけを人間によって与えられてきたイノシシとブタは、人間にとっても身近な存在であり続けてきた動物である。もしかすると、人間は自分たちの姿をイノシシやブタに投影してきたのかもしれない。

## イノシシがブタに変わるとき

—小さな骨からひもとく歴史の事実—

本郷 一美

(ほんごう ひとみ)

総合研究大学院大学助教授

### 緩やかにブタへ変化

イノシシは、ユーラシア大陸の中緯度地域ほぼ全域に分布する。ブタには大き

く西洋種と東洋種のニグループがあり、それぞれ西アジアと東アジアで別々にイノシシから家畜化された。西洋ブタの祖先は「肥沃な三日月弧」現在のイラン西部、トルコ南東部、シリア北部にかけての地域で家畜化された。この地域では、まず約九五〇〇年前にヤギの飼育が始まり、ウシとブタの家畜化はそれより一〇〇〇年以上遅いとされていたが、最近の研究により、イノシシの家畜化もヤギと同じくらい古い可能性が出てきた。イノシシの家畜化過程は、先史時代の遺跡から出土する骨をもとに探ることができる。イノシシとブタの骨のもつとも顕著な違いは、大きさと頭蓋骨のかたちである。ブタはイノシシより小型で足が短い。鼻で土を掘り返すことが少なく、柔

らかい物を食べるブタは、イノシシより鼻面と顎が未発達になる。横から見ると、イノシシは顎から鼻まで直線的で長い。ブタでは丸みを帯びる(写真1)。さらに顔面が短くなった現代のブタは鼻面が凹んでいる。ブタは顎が短くなったため歯も小型化し、曲がつて生えることもある。しかし、家畜化初期のブタを形態的にイノシシと区別する事は難しい。品種改良が進んでいないブタは、鼻面は直線的で、色が黒く、体毛が多く、外見は小さなイノシシのようである(写真2)。

トルコ南東部のチクリス川とユーフラテス川の上流域は、イノシシが家畜化された場所のひとつと考えられる。タウルス山脈から流れ出る中小の河川がふたつの大河に注ぎ、新石器時代は湿地、森林、ステップなどの多様な環境が入り混じる豊かな土地であった。この地域では、イノシシに特別な象徴的意味が付与されていたらしい。ウルファ近郊のギョベクリニペ(約一万一〇〇〇年前)は、農耕開始以前の祭祀遺跡で、六メートルの高さのT字型の石柱がストーンヘンジのように円形に配されている。石柱のなかにはイノシシの浮き彫りが施されたものがあり、イノシシの石像も出土している(写真4)。

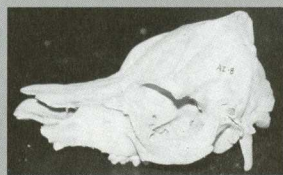
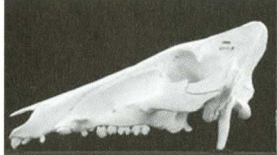
チクリス川支流沿いにあるチャヨヌ遺跡は、一万年前から当まれた新石器時代の遺跡で、出土する動物骨の半分近くをイノシシが占める。この遺跡で、集落周辺の畑や川沿いの湿地に寄ってくる野生イノシシを積極的に狩猟しつつ、少数の個体を飼育するようになった過程を追うことができる。約九〇〇〇年前ごろか

らイノシシの骨のなかに、野生のものより小型のものが混じるようになる。小型個体は徐々に増加し、約八〇〇〇年前以降は明らかに大型(野生)と小型(家畜)のニグループが存在する。おそらく、子どものイノシシを拾って育てたのが初まりではないだろうか。イノシシからブタへの変化は緩やかなもので、両者の交雑も頻繁にあったと考えられる。

### イヌの次に古くつきあ

イノシシと人の関係が深まったのは少なくとも一万年前にさかのぼるとの議論もある。もともとイノシシが分布しないキプロス島など地中海の島々の遺跡で、新石器文化の伝播とともに、イノシシの骨が出土し始めるのである。人の手で島に運ばれたもので、イノシシの飼育が始まっていた証拠とする研究者もいる。しかし島で出土するイノシシの形態やサイズは野生のものとは区別できない。西アジア本土で家畜化がすすむ以前であること、キツネやシカなども島へ運ばれており、野生動物を生け捕りにして島に放すのは古今東西のハンターに見られる行為であることから、飼育されていたとは限らないとの意見もある。日本でも地中海の島々と似た状況があり、ブタの飼育が始まる以前の縄文時代に、もともとイノシシが生息しない北海道や伊豆諸島の遺跡からイノシシが出土する。イノシシは、イヌに次いで古くから人とつきあってきた動物なのである。

(写真1)ニホンイノシシの頭蓋骨  
《獨協医科大学ほ乳類頭蓋画像データベース(第2版)》  
http://macro.dokkyomed.ac.jp/mammal/jp/mammal.html



(写真2)  
東南アジアの家畜、  
ブタの頭蓋骨



(写真3)  
ベトナム南部の  
在来種のブタ



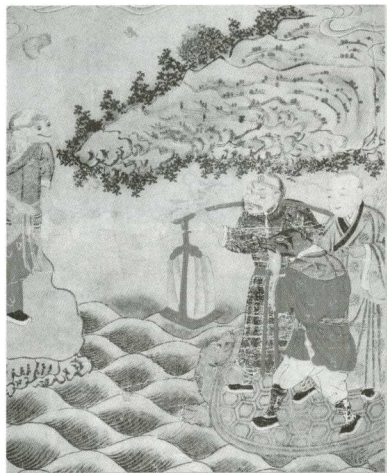
(写真4)トルコの  
ギョベクリ・テペ遺跡の  
イノシシ浮き彫り

イノシシをとらえたバイワン族のハンター(台湾)

ブタの内臓を酒とショウガで炒めた、福建省客家の名物料理

ブタ肉は中国では欠かすことのできない食材(中国・福建省)

特集 イノシシとブタ



清代『西遊記図巻』の猪八戒。耳が小さく顔はつき出ていてまるでイノシシのようである



イノシシに乗る摩利支天像。『図像抄』巻9摩利支天菩薩(称名寺蔵神奈川県立金沢文庫保管)

明代木雕摩利支天像。後頭部にブタの顔が添えられる



# おいらは猪八戒、イノシシよりは偉いのだ

磯部 彰 (いそべ あきら)

東北大学教授

「西遊記」でいちばんの人気者は、意外にも孫悟空ではなく、欠点だらけの猪八戒。二〇〇七年の干支は「猪」で、日本人は「猪」を「イノシシ」と思っているが、中国では「ブタ」さんに当たる。だから、猪八戒とは、ブタ八戒さんということになる。

## 下界での神様の姿

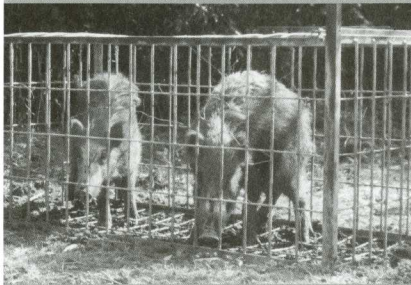
「西遊記」でいちばんの人気者は、意外にも孫悟空ではなく、欠点だらけの猪八戒。二〇〇七年の干支は「猪」で、日本人は「猪」を「イノシシ」と思っているが、中国では「ブタ」さんに当たる。だから、猪八戒とは、ブタ八戒さんということになる。

「西遊記」でいちばんの人気者は、意外にも孫悟空ではなく、欠点だらけの猪八戒。二〇〇七年の干支は「猪」で、日本人は「猪」を「イノシシ」と思っているが、中国では「ブタ」さんに当たる。だから、猪八戒とは、ブタ八戒さんということになる。

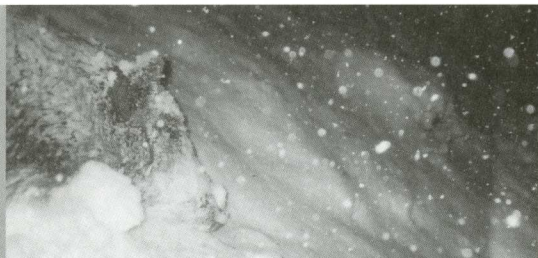
## 人間くさく親しみやすく

かつて、猪八戒が登場する以前、孫悟空は両面的な性格をもつサルで、取經の旅の前は悪い暴れザル、奥さんももっていたと表現されていた。ところが、三蔵に帰依するとまじめ一方のサルになる。そのまじめ一方のサルとして孫悟空を描いていくため、古い時代の『西遊記』でサルがもっていたやくざな部分を全部、猪八戒、つまりブタにくつつけた。猪八戒に、女好き、博打好き、怠け者、寝るのが好き、食うのが好き、といった人間のもつ弱みや性格がすべて押しつけられた。だから、猪八戒は三蔵法師の一行のなかでは、もっとも人間くさく、かつ親しみやすい、イノシシ様になったのである。

# イノシシとブタ



(写真2) 水田近くに置かれた駆除用のオリで捕獲されたイノシシ



(写真4) 雪のなか、獣道をラッセルするイノシシ。イノシシによって除雪された獣道を他の動物が利用する。これも生態系のなかで果たすイノシシの役割だ



(写真3) 耕作放棄地に囲まれた水田はイノシシの標的になる



(写真1) 各地に残るシシ垣のなかには、長さが10キロメートル以上のものもある

# イノシシと人間の共生

高橋 春成 (たかはし しゅんじょう)

奈良大学教授

## シシ垣を築いた時代

イノシシは、いわゆる山深いところにいる動物ではない。多くは里山といわれるような低山部に生息してきた。里山の人びととイノシシの攻防を物語るものとして、各地にシシ垣が残っている(写真1)。これは、イノシシやシカなどが田畑に侵入してこないように築かれた垣で、江戸時代などに築かれた石積みや土盛りの遺構が山麓や山間に見られる。人間の居住地域と重なり合うイノシシの侵入を阻止するには、このようなシシ垣は有効な手段であったし、それによって人間とイノシシの棲みわけが成立していた。もちろん、シシ垣によってイノシシやシカの侵入が完全に阻止できたわけではなく、人びとはシシ垣の修復や点検、突破して侵入したイノシシやシカに対応する必要があった。

## 里中に侵入するイノシシ

ところが近年、人間とイノシシの棲みわけは壊れ、それに伴ってイノシシが里中に侵入している。そしてイネを中心とした農業被害が深刻化している(写真2)。里中へのイノシシの侵入が最初に問題となったのは、高度経済成長期のころである。この時期、山間や山麓の農村部から都市部への人口流出が目立ち、いわゆる過疎化のなかで、利用集約度の低下した里山や放棄された耕作地が各所で見られるようになった。里中や里山の荒廃は、米の生産調整、高齢化、兼業化のなかで今も進行している。

る(写真3)。

このような状況はイノシシにとつて好都合であった。水田の耕作放棄地にはススキ、ササ、クヌなどが侵入し、イノシシに食料、水、潜伏場所、移動経路を提供した。イノシシはツキノワグマやカモシカなどと違って、もともと集落周辺の里山に棲む動物である。それゆえに、里中やその周辺に里山の生態環境ができると、そこにひきつけられる。

## 共生へのあらたな視座

拡大するイノシシ被害のなかでイノシシに対する「害獣視」は高まる一方で、生物多様性がキーワードとなっている今日、わたしたちはイノシシも共存する道を求めなければならぬ。被害地では心情的に抵抗があるだろうが、まず、わたしたちはイノシシを「地域の財産」と見なさなければならぬ。なぜかという点、地域の生物多様性の構成員だからである(写真4)。近年のイノシシの里中への侵入の背景には、社会経済情勢の変化がある。メダカやホタルといった少なくなつた生き物を復活させようとする環境を整える取り組みが各地でおこなわれているのと同じように、わたしたちはイノシシの生息環境を整えようとする取り組みをおこなう必要がある。これまでは、イノシシとのかかわりといえば「狩猟」と「被害防除」がキーワードであったが、イノシシとの共生にあらたな視座を盛り込む時代がきている。

ツツ密教のマリチー(摩里支天)が率いたブタ一家の影響もあるらしい。

初期の猪八戒像は仏教世界のお湯にとつぱりとつがっていたが、もちろん、それだけで今日の猪八戒像ができていたのではない。三蔵法師の物語が発展し、明後期の完成版では、猪八戒は、例えば天蓬元帥という元帥のなれの果てだといわれる。天蓬元帥というのは、道教の護法神のひとつで、黒い顔をしている。猪八戒は、元代に黒ブタとして登場していたので、黒い顔をした神様が猪八戒のイメージの拡充とともに投入され、結果として、猪八戒は摩里支天の御車將軍から少し昇格し、天蓬元帥という位の高い道教系の神様が下界にあらわれた姿と表現される。